

温 故 知 新

静岡県立中央図書館所蔵の貴重書紹介(12)平成12年11月30日

駿河国地誌シリーズ(その2)

駿 河 国 新 風 土 記 (S220/11)

風土記とはその地方の地理や歴史を記した書物のことです。『駿河国新風土記』は新庄道雄(1776~1835)が文化13(1816)年から天保5(1834)年にかけて記した全25巻の風土記で、江戸時代を代表する地誌の一つです。「新」とつくのは『駿河国新風土記』の前に『駿河国風土記』が著されていたからです。

道雄は通称、三階屋甚右衛門といい駿府江川町で宿屋を営んでいました。間口10間(約18帖)、奥行き20間(約36帖)もある大きな家でした。幼少の頃より学問が好きで、30代半ばには『駿河大地誌』の編さん者の1人に選ばれていました。前号で触れたように『駿河大地誌』編さん事業は、企画者の転勤、相次ぐ編さん者の死亡などによりとん挫してしまいました。編さん者の一員であった道雄は藤泰にやや後れて、自力で駿河国の地誌を記すことを決意しました。当時、道雄は平田篤胤の門人でしたので、できた原稿はその都度江戸まで出向いて篤胤に見てもらい、指導を仰いだのでした。

こうして国府(駿府)、益津郡、有度郡、安倍郡、富士山、庵原郡について記しましたが、残念なことに志太郡、駿東郡、富士郡は欠落しています。道雄が天保6(1835)年に死去したためです。『23巻(富士山上巻)』にはこんな文があります。「~中略~富士山の高さ、直立26町(1町:約109帖)といへるは、いづこにおいてはかりしにや、昔は其術もくわしからねば証としがたし 近きころ、伊能勘解由(伊能忠敬)といふ人、駿東郡須走村(現:小山町)に宿りて測量して、直立36町ありと某里人に語りしにさもあらんか」。道雄と忠敬はほぼ同時代を生きた人物であり、忠敬が須走村に泊まり富士山の高さをかなり正確に実測していたことがわかります。

『駿河国新風土記』も『駿河記』同様出版されず、手書きの本があるだけでしたが、昭和になって足立鋏太郎が校訂し、同9(1934)年までに飯塚伝太郎によって出版されました。この本には欠けていた志太郡、駿東郡、富士郡に、桑原藤泰、贅川良以外の著を当てています。道雄没後100年にして『駿河国新風土記』は広く世に出ることになったのでした。当館では江戸時代の写本といわれる25巻(9冊)を所蔵しています。

静岡市紺屋町の小梳神社には新庄道雄の石碑が堂々と建っています。この石碑は道雄の功績をたたえた平田篤胤の碑文がぎざまれている由緒のあるものです。

【参考資料】

『修訂・駿河国新風土記上・下巻』(S220/12 図書刊行会)

『静岡県印刷文化史』(S740/1 静岡県印刷工業組合)